

5. 北海道新酪農地帯における 農民層の労働—生活過程と「家」

布施 鉄治 (北海道大学)
日 徑 久 (北見工業大学)
安倍 恒雄

(一)表の如く、近時の北海道における農民層の分解形態は、経営耕地規模別にそれを見ると、総農家戸数の激しい減少の中で、他極に二〇町、三〇町という地積を集中した農民層が輩出しているところにその特徴が求められる。本報告で事例としてとりあげる釧路支庁、標茶町、虹別は、新酪農地帯のひとつとしてかゝる分解形態が典型的に顕在化している地区である。しかし一歩その農業経営の内実に踏みこむと、激しい農民層分解過程の中で形成されつゝあるかゝる「上層農家群」は多額の制度資金の導入によって、体制的に急速に育成された「上層農家」として存立し、多額の負債下、あらたなる段階での危機が深化していることがあきらかとなる。

(二)本報告は、こうした現段階において体制的に創設されつゝある專業酪農民層の矛盾にみちた労働—生活過程を土台において、経営及び「家」の問題、また彼らがかゝる顕在化しつゝある矛盾の止揚過程として現に形成しつゝある社会構造の問題、それらを買ぬく統一論理をさぐるために試みられた試論である。

③われわれは二つの柱を用意した。第一は、個々の農家の生活史をとおして農民の生活の「たしかなる年輪」をおさえる柱である。こ

経営規模別農家戸数推移

2.5~3.0	3.0~5.0	5.0~7.5	7.5~10	10~15	15~20	20~25	25~30	30~
15941	56857	32824	14320	9361	1715	310	-	-
12262	48180	30567	14934	11919	2871	734	-	-
7376	34867	27773	13637	13547	6369	2764	1127	904
	29363	23698	11490	11029	6628		8268	
82	304	390	374	112	8	3	-	-
43	211	271	237	260	68	9	-	-
9	62	102	98	224	212	142	67	58
	47	53	44	101	173		438	

の分析視角は言葉を替えていようと、日本資本主義発展の中で、わが国農民層が直面する階級的諸矛盾、それを自らの年輪として彼らが如何に止揚してきたかというレベルの問題になる。その年輪とはたんなる個人の年輪ではない。何よりも家の生活史として、また彼らの社会の歴史として定在化せしめてきているものである。

事例でみる虹別から別海にかけての地帯は、戦前関東大震災後、相対的過剰人口のはげ口として北海道最後の広大な開拓地として開発せられたところであるが、一戸五町の穀獲農業での指導が失敗、さらに農家をまびいての樺太への再入植が計られた地帯である。長い間、入植農民にとっての主要な現金収入源は山林労働であった。農民にとって酪農経営への志向性が顕在化しはじめたのは昭和三十一年初期、專業酪農の展開は農基法農政以降、とりわけ虹別の場合、三〇年代後半以降である。数次にわたる「構改」で機械化、多頭数化が積極的に図られるが、「機械利用組合」は形式的で個別農家の累重的負債増加の中で、階層分化も急速にすすんでいる。しかしこの間にあって地域社会それ自体として数々の生業形態での農業経営確立への試みがなされている。養豚共同経営が形成された段階もあった。しかしそれらは定着せぬまま、酪農民は一見、個々バラバラにされ、かつての部落社会は大きく変容しつつある。

⑤第二の柱として私達は、農民層の労働・生活過程を土台にした現状分析を用意した。私達は階層ごとの各農家の経営状況をあきらかにし、生産組織体としての、また生活集団としての「家」の中での役割構造、それに規定された各成員の現実の労働・生活過程をとり

表 北海道及び標茶町における年次別・

	年	総数	例外規定	ha					
				0.1~0.3	0.3~0.5	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.0	2.0~2.5
全 道	35	233634	788	28503	15849	16001	12231	12928	16006
	40	198969	771	21549	11568	13087	9522	9492	11518
	45	165978	1081	16328	8349	10607	7386	6517	7318
	48	144518		29123					24919
標 茶 町	35	1548	-	52	16	29	56	54	68
	40	1278	1	37	16	23	30	29	39
	45	1061	4	33	9	11	13	7	10
	48	915	6		29	7			17

おさえ、そこでの諸矛盾を剔出した。そしてさらに各農家がその生産生活の全経済・社会過程を完うするために不可欠にとり結ばざるを得ない「家」外との諸集団（他農家を含めて）組織、機関とのネットワークをその節々を明確にしながらとりおさえた。その中には、たとえばサイレージの切りこみ作業等、他農家との共同作業過程も入ってくるが、こゝでとりわけ重要な意味をもつて立ちあらわれてくるのが経済的諸機関（独占乳業会社、農協等）及び社会的諸機関（地方自治体、営農指導機関）等との諸関係である。個々の農家は少なくともかゝる地域経済機関との諸関係をとおして、全国レベルでの総経済過程にくみこまれるが、その中で農家経済の矛盾が深まれば深まるほど、主要なる矛盾を止揚するためにあらたなる経済諸関係を創出せざるを得ないし、またその矛盾を止揚するための社会諸関係を創設せざるを得ない。しかもこれを「たしかなもの」として構造化させる。後者についていうならばそれら社会過程をフォーマルな組織として、地域社会機構として公的に定着させる営みをつゞける。虹別の酪農民は現在独占企業の低乳価政策へあらたなる対応をせまられているが、この虹別には全日農の組織もすでに結成されているし、またこゝの町政は革新町政としてある。

私達はかゝる分析枠の中に、本一分家のネット・ワーク、また従来の部落の社会構造的もつ機能の具体的変容を位置づける必要がある。そうして階級的諸矛盾の中で、それを止揚しつゝ、あらたなる刃関係の中でつくられつゝある社会構造のもつ意味をあきらかにする必要があると考える。